

Level 2 More Patterned Stories は、英文を自分の力で読む練習を多くし、また Level 2 の様々なストーリーに頻繁に使われる vocabulary に見慣れさせるように製作されました。ご存じのように ORT は、イギリスの子どもの English(国語)の教材ですが、母国語が英語の子どもが全員すらすらと読めるようになる訳ではありません。なかなか文字と音が結びつかない、いわゆる slow learners もいます。その子ども達のために、基本文を繰り返し、新出単語はイラストを見て推測できるように作られた絵本は、EFL (English as a Foreign Language)として英語を学習している日本の子ども達の学習にぴったりです。EFL の子ども達は、英語学習の時間以外で英語に接する機会が皆無、または殆ど無いので、英語を生きた言語として体験することがありません。同じレベルでの反復練習が含まれた絵本をたくさん読んで聞かせ、自分でも「読める」という満足感をあじあわせましょう。

私はレッスンで多くの絵本を使います。その際、3つの段階を考えます。

- | |
|---|
| 1) Pre-reading
2) Reading together
3) Follow-up |
|---|

1)では絵本に含まれる単語、トピック、構文をあらかじめ導入します。そうすることで、英語の絵本を読んでもらう子ども達の負担を少なくします。もちろん、この段階をレッスンで扱わなくても、子どもがすーっと理解してしまう優れた絵本はたくさんあります。また、コースブックで Family を学習したら、そこで学習した単語が幾つか含まれている絵本を読んであげることで、子どもは自然に 2)の Reading together に入っていくことができます。

2)を単に Reading としないで Reading together としているのは、美しい朗読を聞かせるのではなく、子ども達が参加する楽しい読みを実践するということです。絵本を楽しんでいる子どもは、Repeat after me.と言わなくても、先生(またはお母さん)と一緒に英語を声に出して読みたくなるものです。

3)の Follow-up では、絵本を何度も読んで吸収した英語を、別の場面(situation)や文脈(context)で使うアクティビティをします。こうすることで、子ども達は英語を自分の言葉として使うようになります。

Level 2 More Patterned Stories は、1冊ごとの英語がコントロールされ、同じ構文が繰り返され、新出単語は必ずイラストに描き込まれていますから、1)の段階を飛ばして、いつ読んであげてもかまいません。子ども達に「自分で読める」という自信を与えるために、英文を読む、または「読めるかな」と問いかける前に、絵について話し合い、内容を理解させたり、新出単語をイラストから推測させたり、描かれているものの実物を用意しておいて実際に触らせるなど、なるべく多くのサポートをしてください。1冊ごとの具体的な活用法を参考に、子ども達と英語を楽しんでください。

解 説

外山節子

What Is It?

- 1) 表紙を見せ、この動物は何か話し合います。あらかじめ動物図鑑を用意しておき、両生類のページを子ども達と一緒に見て、表紙の奇妙な生物について調べましょう。タイトルを読みます。
- 2) 1 ページを見せ、絵について話し合います。Kipper たちは、Mum に連れられて散歩しているようです。フロッピーは何をしているか話し合い、Warf, warf! と吠えてみせてから、英文を読みます。2 ページで何が起きるか想像してから、ページをめくります。絵について話し合い、3 ページの英文のセリフは誰が言っているか問いかけます。絵の一番手前に Biff がいる、また said Biff が読めると英文を読むことができます。同様に、絵について話し合って英文の内容を絵から予測して 15 ページまで読み進みます。最後はどうなるか予測してから 16 ページを見ます。獣医さんが野生動物を保護してくれています。獣医さんは vet ということを教えてもよいでしょう。
- 3) この絵本は looked, said, “What is it?” “Is it a ()?” を練習するように作られています。bark は Floppy が活躍する ORT では頻出単語ですが、絵から意味を推測して理解させる context word として扱われています。読めたら誉めます。lost, safe も context words です。
- 4) この絵本では地域の獣医さんが野生動物保護の活動をしています。地域の野生動物保護について調べましょう。インターネットで調べても良いし、地域にセンターがあるのなら、見学に行っても良いでしょう。6-7 ページから 10-11 ページの Mum の様子に子ども達は気づくでしょうか？靴底に何かついたのを取ってきれいにしています。動物のフンが話題になったら droppings という単語を教えます。この単語はフンというより「落とし物」なので、外国語として英語を話す私たちが下品にならずに、この話題を口にすることができます。

The Lost Puppy

- 1) 表紙を見せ、絵について話し合います。この大きな骨は、この小さな犬のものでしょうか？タイトルを読みます。表紙の犬は「迷子の子犬」なののでしょうか？この絵本で何が起きるか想像します。
- 2) 1 ページを見せ、絵について話し合います。子ども達は Mrs May を覚えているのでしょうか？ Level 2 Patterned Stories の It's the Weather を見せても良いでしょう。犬を走らせても良い公園にきているようです。Floppy の前に骨があります。表紙の骨は Floppy のものだったようです。英文を読みます。2 ページで何が起きるか想像してからページをめくります。2-3 ページの絵について話し合います。英文を読み、Floppy ran off, too. Everyone said, "Stop!"のように絵について色々な英語を聞かせても良いでしょう。絵について話し合ってから英文を読む、または「読めるかな」と問いかけ、13 ページまで読み進みます。14-16 ページ以降は、Sniff は見つかるか、誰が見つかるか予測してから読み進みます。
- 3) この絵本は、looked を練習するように作られています。couldn't find は context words として扱われています。絵に様々な事柄が描き込まれています。子どもが理解していることを平易な英語で聞かせる良い機会です。例えば、4-5 ページで Mrs May was upset.を読んだら、Floppy が追いかけたプードルを抱き上げている男性を指さして、The man was upset, too.と聞かせることができます。7 ページにメガネが落ちています。Sniff がみつかった木は、Level 3 の The Rope Swing の場面と同じです。木の根もとに落ちているタイヤの説明をしながら The Rope Swing を読んでかかせても良いでしょう。また 16 ページの "What a clever dog!"と同じパターンの Level 2 What a bad dog!を読むこともできます。
- 4) 子ども達に絵本の登場人物の役を割り当て、act out します。先生が絵本を読むのに合わせ動作をするだけでも良いし、子ども達が知っている英語で台本を作っても良いでしょう。例えば、1 ページは、次のようにもできます。

Mrs May: I have a puppy.
Biff: Cute! What's your name?
Sniff: I'm Sniff.

New Trees

- 1) 表紙を見せ、誰がどこで何をしているか話し合います。タイトルを読み、どんなお話か想像させます。ポスターの英語を読み、内容を教えます。
- 2) 1 ページを見せ、絵について話し合います。子ども達は、植樹を見たことがあるのでしょうか？根本を包んだ若木、肥料の袋が並んでいます。英語を指さし、

読める単語があるか聞きます。1 つでも読めたら誉めます。2 ページで、みんなが何をするか想像させてから、ページをめくります。2-3 ページの絵について話し合ってから英語を読みます。遠くで木を植えている人が見えます。Dad がお金を払っています。4-5 ページで誰が何をするか予測してからページをめくります。6-7 ページで誰が何をするか予測します。この方法で 15 ページまで読み進み、最終ページで何が起きるか予測してからページをめくります。

- 3) この絵本は gave, put を練習するように作られています。また by the (名詞) という表現を繰り返しますが、入れ替えの単語は絵から推測して言えます。植えた木に付けられたラベルの英語を読みましょう。登場人物の名前の sight reading の練習にもなります。
- 4) 公園に緑を増やすために、単にお金を寄付するのではなくて、1 本の木を植え、名前のラベルを付けることで、植えたあともずっと公園を守る気持ちが湧く運動です。これに似た活動が地域で行われていないか調べてみましょう。このストーリーを act out しましょう。生徒ひとりひとりが、何か文房具を教室に寄付するストーリーにします。子どもの 1 人がエンピツを持って見せ、それを好きな場所に置きます。先生は、Miho gave a pencil. She put it by the chair. のように英語で言って聞かせ、クラス全員がリピートします。慣れたら、キーワードを与え、子ども達だけで英語を言うように指導します。
- 5) 自分ならどんな木を植えたいか、子ども達に聞きます。植物図鑑やインターネットを使って、各自が選んだ木の絵を描かせます。ラベルを描き加え、絵本と同じように木の種類、planted by (name) を書き込みます。この絵は教室に飾りましょう。

Up and Down

- 1) 表紙を見せ、誰がどこにいるか話し合います。駅にも見えますが、Shop guide を読むと、Dad と Mum がショッピングセンターに来たことがわかります。タイトルを読み、この絵本で何が起きるか想像します。
- 2) 1 ページを見せ、絵について話し合います。Dad と Mum は何を話し合っているのでしょうか？一緒に買い物をするのでしょうか？2人がどこに行くか想像してからページをめくります。2-3 ページの絵について話し合ってから英語を読みます。Mum は何を買うのか予測してからページをめくります。4-5 ページの絵について話し合い、英語を予測させ、希望者に読ませます。同様にして、読み進みます。
- 3) この絵本は wanted, went, came, up, down, couldn't を練習するように作られています。このパックの中では単語数が少なく、絵から推測することで英文を

読むサポートになりますので、絵について話し合ったら子どもが自分で読むようにし向けましょう。各階が何の売り場か把握していると良く理解できます。売り場の英語も、絵から推測できますから、絵について話し合うとき、子どもに読ませるようにしましょう。

- 4) Act out しましょう。教室の中央を 2 階にします。1 階と 3 階を決め、エスカレーターのスペースを決めます。Dad と Mum の役を割り当て、先生が英文を読むのに合わせて動きます。エスカレーターに乗っているのを表すために、down のときは、だんだんしゃがみ込むように歩き、up のときは、最初しゃがんでだんだん背を伸ばして歩きます。動きが面白いので、子ども達の好きなアクティビティです。全員が経験するようにしましょう。慣れたら、セリフを考えて言いましょう。例えば、2-3 ページでは、Dad: I want a book. I'm going up. Mum: See you later!とできます。

The Little Dragon

- 1) 表紙を見せ、Kipper と Mum が何をしているか話し合います。タイトルを読み、Kipper が何をしようとしているか想像します。学校での発表会でしようか？
- 2) 1 ページを見せ、絵について話し合います。Dad が参加しているし、照明は家庭にあるスタンドなので、お家で発表会をしているようだと思わせます。英語を読み、次に誰が登場するか想像してからページをめくります。絵について話し合ってから、英語を読みます。希望する子どもに読む機会を与え、読めたら誉めます。この方法で最後まで読み進みます。最終ページの絵を見て、観客が Wilma's Mum, Kipper's Mum, Grandma, Grandpa なので、やはり子ども達が家族に見せるお芝居をしたのだと確認します。
- 3) この絵本は I am, said が読めれば、絵から英文を推測できるように作られています。また、knight, fight, frightened の 3 つの単語は、子どもにとって見ただけで難しそうな単語ですが、ストーリーから推測して読める context words です。もし、子どもが興味を持ったら、
fight
knight
light
night
right
tight
と書き出して、難しそうに見えるけれど最初の文字が分かれば読め、読めれば意味が分かることを教えましょう。

- 4) 英文の半分がセリフです。役を割り当てて、act out しましょう。小道具や衣装は家庭にあるもの、紙で作れるものばかりですから、教室の発表会にしてもよいストーリーです。

The Band

- 1) 表紙を見せ、誰が何をしているところか話し合います。子ども達は Dad を見つけられるでしょうか？タイトルを読み、Dad がアマチュアバンドに入ったことを推測させます。楽器の名前を知っているでしょうか？絵辞典を用意して、trumpet, clarinet, horn など絵から単語を探しましょう。
- 2) 1 ページを見せ、絵について話し合います。Dad は一生懸命ですが、他のみんなはどう思っているのでしょうか？2 ページで何が起きるか話し合ってからページをめくります。2-3 ページの絵について話し合ってから英語を読みます。見開きごとに、Dad played in (場所). Floppy barked at Dad. というパターンが繰り返されるので、絵について話し合ったら子どもが自分の力で読むようにし向けます。
- 3) この絵本は、played, barked を練習するように作られています。場所を表す単語、house, garage, shedなどは絵から推測できる context words です。
- 4) Floppy はどうして吠えたのでしょうか？公園では、Floppy だけでなく、他の犬も吠えました。サイレン、時報、物売りの車の呼び声が聞こえると一緒に吠える犬がいます。Floppy は、Dad のトランペットの音に反応したんだね、と子ども達が理解するように話し合います。絵本全体を act out しましょう。Dad 役の子どもは、トランペットの音真似をし、Floppy 役の子どもは warf, warf と言います。1) で話し合った、トランペット以外の楽器で新しいお話を作りながら act out します。例えば、Dad played his clarinet. と始め、Dad 役の子どもはクラリネットの音真似をします。

Level 2 / More Patterned Stories

What Is It?

何だろう？

フロッピーはいろいろなものの臭いをククンと嗅ぎ回るのが大好きです。だから、いろいろなものを嗅ぎ回れる公園が、フロッピーは好きです。そして、何かを見つけた時は、フロッピーは吠えて子ども達に知らせます。でもある日のこと、草むらに横たわる風変わりなものを発見したフロッピーは、とても驚きました。それは黒い模様のついたバナナのように見えました。子ども達に気がついてもらうために、フロッピーは吠えました。

でもそれから、もっと驚くことがありました。その物体は、バナナなんかじゃなくて、四本の足と長いしっぽのついた生き物だったのです。それはじっと横たわり、フロッピーがくりかえし吠えても動きませんでした。子ども達はママと一緒に公園に来ていました。フロッピーから目を離さないようにママから言われていたので、ビフはフロッピーが遠くへ行き過ぎないようにするためにフロッピーのところへ行きました。「まあ、フロッピー！それなあに？」フロッピーが草むらの中を見つめているのを見て、ビフが言いました。ビフも黒と黄色のその生き物を見ました。「それなあに？」ビフはそのような生物を見たことがなかったので、それが突如として変貌し、フロッピーの鼻にかみついたりしないか心配しました。そこでフロッピーの首輪をつかんでその生き物から引き離しました。他の子ども達もやってきたので、ビフはみんなにも何かおもしろいものがあることを教えてあげました。

ウィルフもその生き物をのぞき込み、「なんだろう？」と言いました。そして、「水に住んでる生き物じゃないのかな？小川に連れて行ってそっと放してやった方がいいかもしれない」と言いました。ビフは「正体がわかるまで、私は触らない方がいいと思うわ」と言いました。

ウィルマも膝をついてすぐ近くから覗き込みましたが、それがなんという生き物なのかわかりませんでした。それはやわらかく湿った肌をしており、水辺に住む生き物のように見えました。「なんだろう？カエルかしら？」とウィルマは言いました。「なんだろう？」チップも言いました。上半身をかがめて近くで見ると、その生き物はしっぽが長く、幅のせまい頭をしていました。「トカゲかな？」とチップは言いました。ウィルフが「トカゲかもしれないけど、でも、トカゲって黄色と黒だったっけ。僕はイモリ的一种なんじゃないかと思う」と言いました。ビフは「私はイモリだとは思わないわ」と言いました。

ママもやってきました。「なんだかわからないの。私たち、カエルでもトカゲでも

イモリでもないと思うの」とビフが言いました。ママもかがみこんで、すぐ近くからじっくりその生き物を観察しました。「それ、なんだろう？」子ども達が言いました。

ママはその生き物をとても注意深く、大きな葉っぱの上に移し換えて持ち上げました。「これはサンショウウオよ」ママは言いました。「本当はこんなところにいるはずないのだけれど、迷子になってしまったのね。きっと誰かのお家から逃げ出したんだと思うわ。サンショウウオを飼う人がいるのよ。でも、その場合は特別な水槽で飼うのよ。サンショウウオは温かなところで飼わなきゃいけないの。このサンショウウオは動物病院へ連れていきましょう」とママは言いました。そして、みんなで迷子のサンショウウオを動物病院へ連れて行ってあげました。

獣医さんは、迷子のサンショウウオを見て、えさをやり、暖かくしてあげる必要があると言い、特別な水槽にサンショウウオを入れました。「このサンショウウオ、どうなっちゃうの？」とウィルマが尋ねると、獣医さんは「もし持ち主が名乗りでなければ、ここで飼育しますよ」と答えました。キッパーは「じゃあ、僕たち、また見に来られるかもしれないね」と言いました。

What Is It? 何だろう?

- PG 1 Floppy barked.
フロッピーは吠えた。
- PG 2-3 Floppy barked and barked.
'What is it?' said Biff.
フロッピーは何度も吠えた。
「何だろう？」と、ビフは言った。
- PG 4-5 Biff looked.
'What is it?' she said.
ビフは見た。
「何だろう？」と、彼女は言った。
- PG 6-7 Wilf looked.
'What is it?' he said.
ウィルフが見た。
「何だろう？」と、彼は言った。
- PG 8-9 'What is it?' said Wilma.
'Is it a frog?'
「何だろう？」と、ウィルマが言った。
「それはカエル？」
- PG 10-11 'What is it?' said Chip.

- 'Is it a lizard?'
「何だろう？」と、チップが言った。
「それはトカゲ？」
- PG 12-13 :Mum looked at it.
'What is it?' said the children.
ママがそれを見た。
「何だろう？」と、子ども達は言った。
- PG 14-15 'It's a salamander,' said Mum.
'It's lost,' she said.
「それはサンショウウオよ」と、ママが言った。
「迷子になったんだわ」と、彼女は言った。
- PG 16 The salamander was safe.
サンショウウオは助けられた。

The Lost Puppy

迷子になった子犬

メイ先生は、ビフやチップ、ウィルフの担任の先生です。学校の外でメイ先生と会うことはめったにありませんが、たまたまある日、子ども達は公園で先生を見かけました。メイ先生はスニフという名前の子犬を散歩させていました。子ども達は先生の元へ駆け寄りました。ビフがしゃがんでなでてやるとスニフはビフの手をなめました。「とってもかわいいわ」とビフ。「この子を訓練しているところなのよ」とメイ先生は言いました。

メイ先生はあらかじめスニフのリード(散歩用のロープ)をはずしてあって、呼んだら先生のところへ来るように訓練しようとしているところでした。でも、スニフは、フロッピーが草の上に置き忘れていった、おいしそう大きな骨に気付いて、それをくわえて逃げ出してしまいました。メイ先生がどんなに呼んでも帰って来ません。スニフは骨を持ったまま、だせるだけのスピードを出して逃げて行ったのです。

メイ先生はうろたえました。「こんなことこれまでになかったのに。スニフは骨を持って逃げ出すのをゲームだと思ってるみたいだわ。きっとすぐに戻ってくるでしょう」でも、スニフは戻ってきませんでした。骨がなくなっていることに気付いたフロッピーには、ゲームなんていってる場合ではありませんでした。メイ先生と子ども達はスニフの名前を呼びながら探しましたが、手がかりは見つかりませんでした。考えられることは、スニフが迷子になってしまったということです。

ビフとチップはスニフが走り去った方向にある、公園のはじっここの茂みを探しましたが、いません。子ども達がどんなに探しても、スニフは見つかりませんでした。フロッピーは自分自身に腹をたてていました。普通、犬はとても匂いに敏感で、匂いを手がかりに探しものを見つけられるものです。でも、フロッピーには、あのおいそうな骨の匂いが探せなかったからです。

ウィルフとウィルマは公園の中ほどへ行って池の周辺を探しましたが、スニフは見つかりませんでした。この頃には大勢の人が小さな子犬のスニフを探しまわっていましたが、まだ誰も見つけていませんでした。ウィルフとウィルマは、スニフが遠くで迷子になっていないか心配しました。公園の外には交通の激しい道路があるのです。キッパーたちのママとパパも探しましたが、やはりスニフは見つかりませんでした。ママとパパは誰かがスニフを連れ去ってしまったのではないかと心配しました。

ずいぶん時間がたちました。ありとあらゆる人がスニフを探しましたが、見つかりませんでした。「心配しないで。きっとすぐにでてきますよ」とウィルマはメイ先生を励ましました。

誰もフロッピーに注意をむけていませんでしたが、実はこの時、フロッピーは何

かの匂いに気付いていました。「やったぞ！ついに匂いをみつけた。僕の骨をとりかえせるかもしれない！」とフロッピーは思いました。

フロッピーは匂いの元をたどりました。小川の方へくだり木立を抜け、大きな木の下に出ました。フロッピーは骨を探し、ついに見つけました。そこでフロッピーは、スニフが木のそばで、ぐっすり眠っているのを見つけました。

目が覚めた時、骨をくわえて歩き去るフロッピーを見て、スニフはびっくりぎょうてんしました。スニフは、フロッピーの後を追いかけて走り、ついに公園の真ん中まで戻って来ました。メイ先生は大喜びして言いました。「見て、スニフよ。フロッピーが見つけてくれたんだわ」みんながフロッピーに言いました「なんておりこうな犬だろう。おまえがスニフを見つけたんだね」。

The Lost Puppy 迷子になった子犬

- | | |
|--------|--|
| PG 1 | Mrs May had a puppy.
It was called Sniff.
メイ先生は子犬を飼っていた。
それはスニフと呼ばれていた。 |
| PG 2-3 | Sniff ran off.
スニフが走り去った。 |
| PG 4-5 | Mrs May was upset.
Sniff was lost.
メイ先生はあわてた。
スニフがいなくなった。 |
| PG 6-7 | Biff and Chip looked.
They couldn't find Sniff.
ビフとチップが探した。
彼らはスニフを見つけられなかった。 |
| PG 8-9 | Wilf and Wilma looked.
They couldn't find Sniff.
ウィルフとウィルマが探した。
彼らはスニフを見つけられなかった。 |

- PG 10-11 Mum and Dad looked.
They couldn't find Sniff.
ママとパパが探した。
彼らはスニフを見つけられなかった。
- PG 12-13 Everyone looked.
Nobody could find Sniff.
みんなが探した。
誰もスニフを見つけられなかった。
- PG 14-15 Floppy looked for his bone.
Sniff was by the tree.
フロッピーは彼の骨を探した。
スニフは木のそばにいた。
- PG 16 'What a clever dog!' said everyone.
「なんて賢い犬なんでしょう！」と、みんなが言った。

New Trees

新しい木々

子ども達は公園へ行きました。ちょうど「木を植えよう週間」でした。ビフ、チップ、ウィルフ、ウィルマはパパと一緒に公園へ木を植えに行きました。パパが子ども達に「木を植えよう週間」について説明してくれました。「簡単なことさ。公園の管理人さんから木を買うんだ。そうしたら、決められた場所に木を植えることが許されるんだよ」子ども達が熱心に木を植えたがったので、パパは子ども達もお小遣いから代金の一部を出させることを条件に、全員に木を買ってあげることにしました。

「木を植えよう週間」に、みんな楽しい気持ちになっていました。たくさんの方が木を植えたいと考え、公園にやってきていました。パパと子ども達は、いくつもの種類の木の中から時間をかけてそれぞれの植える木を選び、それからパパが列に並んでお金を払いました。「さあ、今度はそれぞれの木にあわせて植える場所を選ばなくちゃ」とパパは言いました。

管理人のおばさんが一緒にやってきて、木を植えるのを手伝ってくれました。子ども達にお手本を示すため、まずはパパが木を植えました。オークの木です。パパはこの木を、小屋のわきに植えました。「100年後にはどんなにか大きな木になるだろう」。

次は、チップが柳の木を植えました。たくさん日陰をつくる木です。チップは柳の木を、小川のそばに植えました。「何年かしたら、立派になるでしょうね」と管理人さん。フロッピーは肥料の袋をくんくん嗅ぎながら、(これ食べられるのかしら?)と考えていました。

次は、ビフが木を植えました。地面が固く、穴を掘るのは大変でした。選んだのは、紫色の葉っぱをした紫ブナです。ビフはそれを、池のそばに植えました。管理人のおばさんが言いました。「ゆっくりゆっくり育つでしょうけど、いつか大きくなって、公園のこの辺りにぴったりなすばらしい木になるわ」フロッピーは、袋からこぼれた肥料の匂いを嗅ぎながら、(本当の骨の方がいいや)とっていました。

今度はウィルフの番です。ウィルフは、穴を掘って木を植えると、念入りに水をやりました。大きな幅の広い葉っぱをしていてやがて実をつける、クリの木です。ウィルフはそれを、橋の近くに植えました。「何年かしたら、実が取れるわね。橋の近くによく似合うわ」と管理人さんが言いました。フロッピーは(骨粉の肥料は、本物の骨には絶対かなわない)とっていました。

ウィルマが最後に、ブランコのそばにカエデの木を植えました。穴を掘り、木を植え、水をやってから、添え木をあてました。カエデの木は一年のおしまいの頃に、葉っぱの色が、淡い緑から鮮やかな赤へと変化します。「遊び場(play area)のそばにはカエデがあつてるわね」と管理人さんが言いました。フロッピーはとい

えば、ある計画を立てていました。

フロッピーは思いました。「みんなが穴を掘ったり物を植えたりしてるんだったら、僕も参加したいな」そして、フロッピーもブランコのすぐ近くに、穴を掘って骨を植えました。それを見て、パパが笑いました。

フロッピーは、骨を完全に埋めたのではなく、骨の端っこが地面の上に残るように、骨を地面に突き刺したのです。パパは「フロッピーが植えた骨」というラベルを作って、その骨に縛り付けました。「おかしな木だね。あまり大きく育ったりはしないと思うな。これ、なんていう名前？」とチップが言いました。「おかしな骨さ」とパパが言いました。

New Trees 新しい木々

- | | |
|----------|---|
| PG 1 | The children went to the park.
子ども達は公園に行った。 |
| PG 2-3 | It was 'Give a tree' week.
Everyone wanted to give trees.
'木を植える' 週間だった。
みんなが木を植えたいと思った。 |
| PG 4-5 | Dad gave a tree.
He put it by the shed.
パパが一本の木を植えた。
彼はそれを小屋のそばに植えた。 |
| PG 6-7 | Chip gave a tree.
He put it by the stream.
チップが一本の木を植えた。
彼はそれを小川のそばに植えた。 |
| PG 8-9 | Biff gave a tree.
She put it by the pond.
ビフが一本の木を植えた。
彼女はそれを池のそばに植えた。 |
| PG 10-11 | Wilf gave a tree.
He put it by the bridge.
ウィルフが一本の木を植えた。
彼はそれを橋のそばに植えた。 |

- PG 12-13 Wilma gave a tree.
She put it by the swing.
ウィルマが一本の木を植えた。
彼女はそれをブランコのそばに植えた。
- PG 14-15 Floppy gave a bone.
He put it in a hole.
フロッピーは骨を一本植えた。
彼はそれを穴に埋めた。
- PG 16 'A funny tree,' said Chip.
'A funny bone,' said Dad.
「面白い木だね」と、チップが言った。
「面白い骨だね」と、パパが言った。

Up and Down

上がったり下がったり

パパはあまり買い物へ行くのが好きではありません。少しの間だけならよいのですが、しばらくたつと不機嫌で怒りっぽくなってしまいます。だから、パパとママが買い物にでかける間、ウィルマのママが自分達の面倒をみてくれると申し出た時、子ども達はほっとしました。「買う物が決まっているならいいんだ。でも、何がイライラするって、こんなふうに大きな店で、ただあてもなく物をみながら歩き回るのがいやなのさ」とパパ。これを聞いてママはため息をつきました。だって、ぶらぶらと物を見て歩くことこそ、ママが一番楽しみにしていることだったのです。

「時間を無駄にしないようにしよう。君は君のほしいものを、僕は僕のほしいものをめいめいで買いに行き、それぞれこの場所へ戻ってきて落ち合おう。一緒に行くと二倍の時間がかかるから」とパパが言いました。ママはもう一度ため息をつきました。パパと言い争っても仕方がないので、ママはパパの意見に賛成し、「また後でここでね」と言いました。パパは本を買いに、エスカレーターに乗って、上の階へ上がって行きました。

ママはガレージのドアを塗るためのペンキ用のはけを買いに、エスカレーターに乗って、下の階へ降りて行きました。ママはエスカレーターがあまり得意ではないので、乗る時はいつもしっかりと手すりにつかまり、足元に注意するようにしています。

ママはちょうどよい具合のはけを見つけることができたので、それを買って、エスカレーターで上へ上がりました。家に帰ったらすぐにガレージのドアを塗り始めようと考えていました。パパはすんなり本を選ぶことができたので、それを買って、ママを待つために二階へ降りていきました。問題はここからです。パパはエスカレーターを降りたところでママを待たばよかったのに、(どうせママの買物にはまだまだ時間がかかるだろう)と思い込んで、ネクタイを見ようとふらふら歩きだしてしまっただけです。

でも、実際には、ここは、あっという間に買物を済ませて二階へ戻って行ったのです。二階に着いたママは、パパの姿がないので、パパはまだ本を探しているのだと思い込んで、パパを探すためにさらに上の階へと上がって行きました。

パパは、ママが三階へ上がっていくところを見かけ、後を追いました。エレベーターが一番上まで来た時に、ママは振り返って、下の方にいるパパに気付きました。そこで(やっぱり、あの場所で私を待ってるんだ)と思い、折り返し下へと降りてきました。つまり、問題はパパは上へ上がっていき、ママは下へ降りてきてしまったということです。

ママが下に、パパが上に着いた時、二人は混乱しました。ママは、パパは上で自分を待っているのだろうと考え、再び上の階へ上がっていき、パパはママはそ

のまま二階で自分を待っているだろうと考え、またエレベーターにのって下へと降りてきました。

一体何回、二人はすれ違ったのでしょうか。でも、ママには計画がありました。ママは、上の階に着くとすぐに、パパが三度目に上昇しようとするよりも早く、再びエスカレーターで下へ降り始めました。ママは、下降するエスカレーターの上から「止まって！」とパパに叫びました。幸運なことに、パパは下でママが降りてくるのを待つことができました。

これらの行き違いで、パパがさぞかしご機嫌が悪いだろうとママは思いましたが、パパは笑って言いました。「なんてことだろう。一日中だって昇ったり降りたりできたかもしれない」。ママは「子ども達と一緒にじゃなくてよかったわ。子ども達に買い物は*どうだったって聞かれたらなんて答えたらいいかしらね？」と言いました。「僕らがどうだったかだって？『*昇ったり降りたりしていた！』って言えばいいさ」とパパは言いました。

(* 買い物嫌いのパパとママが買い物にでかけたこともあり、子ども達が買い物は「どうだった？」と聞いた場合のことを想定した会話。原文では、“How did we get on?”で、get on が「仕事などをうまく進行する、人とうまくやっていく」の意で使われている。これに対する返事の『昇ったり降りたりしていた』は、get on を「(乗り物などに)乗る」の意味で受けて答えたもの。)

Up and Down 上がったたり下がったり

- | | |
|--------|---|
| PG 1 | Mum and Dad went shopping.
ママとパパは買い物に出かけた。 |
| PG 2-3 | Dad wanted a book.
He went up.
パパは本を一冊買おうと思った。
彼は上の階へ行った。 |
| PG 4-5 | Mum wanted a paintbrush.
She went down.
ママはペンキブラシを買おうと思った。
彼女は下の階へ行った。 |

- PG 6-7 Mum went up.
Dad went down.
ママは上の階へ上がって行った。
パパは下の階へ下りて行った。
- PG 8-9 Mum couldn't see Dad.
She went up.
ママはパパに会えなかった。
彼女は上の階へ上がって行った。
- PG 10-11 Mum went down.
Dad went up.
ママは下の階へ下りて行った。
パパは上の階へ上がって行った。
- PG 12-13 Dad went down.
Mum went up.
パパは下の階へ下りて行った。
ママは上の階へ上がって行った。
- PG 14-15 Mum came down.
'Stop!' she said.
ママが下りて来た。
「ストップ！」と、彼女は言った。
- PG 16 'Up and down!' said Dad.
「上がったり下ったりだね！」と、パパが言った。

The Little Dragon

小さなドラゴン

ハーフタームホリデー(学期中の数日間の休暇)のことです。子ども達は、あまりやることもないので、『小さな竜』という名前のお芝居をすることにしました。ウィルフが脚本を書き、配役も担当することになりました。ウィルフがパパに出演を頼むとパパは喜びましたが、ただ立っているだけの木の役だとわかると文句を言いました。

チップは王様の役がもらえました。赤い古いカーテンのマントと、金の厚紙でつくった王冠を身につけました。王様は、自分の領地に獰猛な竜がいると聞き、心配していました。そこへ、ヘルメットと木の武器をもったウィルマが現れました。チップはウィルマをいかめしく見据えながら、「我は王様なり」、「竜と戦うべし」と言いました。

古いシーツに赤い十字を書いたお手製の陣羽織とヘルメットを身につけたウィルマは、立派な騎士に見えます。「我は騎士なり。竜と戦おう。怖くなどないぞ」と言いました。王様が言いました。「竜はとても獰猛なのじゃ。でも、もしやっつけることができれば、おまえには金とチューインガムをやろう」。パパは「木でいるのがうんざりしてきたよ」と言いました。

「わしはとても忙しいのじゃ。すぐに城へ帰らねばならん」と王様。すると騎士は「私は竜を探してやっつけてやります」。チップとウィルマは舞台から退場しました。次に、ウィルフが「第二場」と書かれた標識を持って現れ、続いて竜が現れました。観客たちが笑いました。竜を演じていたのはキッパーで、ちっとも獰猛そうにみえなかったからです。「僕は竜だぞ。でも、僕は小さな竜なんだ」とキッパー。パパは心の中で「俺は木だぞ。そして、腕が痛いぞ」と思いました。

そこに、ドレスを着て小さな冠をつけたビフが登場しました。ビフがくると小さな竜は逃げさり、物陰に身を隠しました。ビフは言いました。「私は王女様よ。でも、何もすることがないし、騎士は竜と戦いに出ていちゃったし、退屈だわ。だけど、私は竜が獰猛だなんて信じない。私は竜が好きよ」。パパは(長いお芝居だなあ)とっていました。

竜は、王女様が自分を恐れていないことを知ると、隠れていたところから出て来ました。王女様は竜と一緒に、木の下で遊びました。王女様がドレスと冠をとって木の枝にひっかいたので、それを持っているのがパパの一番の出番でした。

突然、騎士が登場しました。「我こそは騎士なり」とウィルマが言いました。「獰猛な竜を倒しに来たのだ。そうすれば、人々は私をこの国で一番勇敢な騎士だと言うだろう」そう言って剣を振り上げました。「戦いの用意はできたか、獰猛な竜よ?」「いいえ、僕は怖いです」と竜は言いました。「戦いは好きじゃありません。第一、僕はこんなに小さいんです」パパは心の中でつぶやきました。「やれやれ、

腕がもげそうだよ」。

「頭に来たわ！」と王女様が言いました。「どうしていつも騎士ってやつは竜を倒そうとするのかしら？誰が見たってこの竜が獯猛でも危険でもないことくらいわかるわ。実際のところ、この子はとっても人懐こいのよ」竜は「ありがとう」と言いました。「竜を退治するのが私の仕事なのです。それこそが、騎士が得意とするところなのです」と騎士は言いました。王女様は、「そう、泳ぎも得意であることを願うわ」と言って、騎士を池に突き落としました。観客からは声援があがりました。池はウィルフがラストシーンのために、前もってステージにだしておいた水遊び用のプールです。(木の役はあまりいいもんじゃなかったな)とパパは思いました。

お芝居はこれで終わりになりました。観客達は拍手を送り、役者たちはお辞儀をしてこれに答えました。木に扮したパパは、幹をおりまげることができないので、お辞儀をする代わりに立ち上がって枝を振りました。すると、会場からは大きく拍手喝采です。「なんて素晴らしいお芝居だったんだろう」みんなが言いました。子ども達は喜びました。「ほんの短いお芝居だったけどすごく楽しかったね。またやろうよ」これを聞いて、パパは「なんてこったい！」と言いました。

The Little Dragon **小さなドラゴン**

- PG 1 The children put on a play.
子ども達がお芝居ごっこをした。
- PG 2-3 'I am the king,' said Chip.
'Fight the dragon.'
「僕は王様だよ」と、チップは言った。
「ドラゴンと戦え」。
- PG 4-5 'I am the knight,' said Wilma.
'I will fight the dragon.'
「私は騎士よ」と、ウィルマが言った。
「私はドラゴンと戦うわ」。
- PG 6-7 'I am the dragon,' said Kipper.
'But I am a little dragon.'
「僕がドラゴンだ」と、キッパーは言った。
「でも僕は小さなドラゴンです」。
- PG 8-9 'I am the princess,' said Biff.
'I like dragons.'
「私は王女様よ」と、ビフが言った。
「私はドラゴンが好きよ」。

- PG 10-11 The princess played with the dragon.
They played under the tree.
王女様はドラゴンと遊んだ。
彼らは木の下で遊んだ。
- PG 12-13 'I am the knight,' said Wilma.
'I am frightened,' said the dragon.
「私は騎士だ」と、ウィルマが言った。
「僕、怖いよ」と、ドラゴンが言った。
- PG 14-15 'I am cross,' said the princess.
She pushed the knight in the pond.
「私、怒ったわ」と、王女様は言った。
彼女は騎士を池に押し倒した。
- PG 16 'What a good play,' said everyone.
「何て面白いお芝居ですこと」と、みんなは言った。

The Band

楽団

向かいの部屋からすさまじい音が聞こえて来ました。「あらいやだ。またパパが始めたのね」と、ママが不満そうに言いました。ママは前回、パパがトランペットを吹いた時のことを思い出しました。その時、ママはそのせいで頭が痛くなってしまったのです。ママと子ども達がそっとのぞいてみると、パパはお気に入りの『Oh my papa』という曲を吹いていました。「僕のパパ(my papa)がトランペットの先に靴下でもつめてくれることを願うよ」とチップが冗談を言いました。

パパはみんなにどう思われようと、もっと上手にトランペットを吹けるようになるために、練習をするのだと言います。でも、問題は、パパが家で演奏するたびに、フロッピーが吠えることです。トランペットだけでもひどい音なのに、フロッピーがパパに吠える声まで加わると、その騒音たるや悲惨なものです。ママはパパに、練習するのはよいけれど家の中ではやめてほしいと言いました。

仕方なくパパはガレージで吹くことにしましたが、でも、窓の向こうにパパの姿が見えたり、薄い壁を通して音も筒抜けだったので、フロッピーはパパに向かって前と同じくらい大きな声で吠えました。ママはパパがガレージで演奏するのも困ると言いました。

仕方なくパパは納屋で演奏することにしました。納屋は家から離れているので、これはいいアイデアのように思いましたが、納屋の壁はガレージの壁より更に薄かったので、フロッピーは、一層大きな声でパパに向かって吠え立てました。トランペットの音はお隣さんまで聞こえたので、お隣の小犬までフロッピーと一緒に吠え立てました。「こんなひどい音は聞いたことがないよ」とお隣さんがぼやきました。

パパのトランペット熱は止むことはありません。たくさん練習して大分上達しましたが、それでも、パパが演奏するたびに、フロッピーは吠えました。パパがバンドに参加して演奏する時はフロッピーは吠えることができないので、パパは毎週バンドの練習に参加しました。はじめのうちは大きな音を出しすぎたり間違った音を出してしまうこともありましたが、猛練習をしてとても上手になりました。(フロッピーが僕に吠え立てたりできない練習場所がみつかってほっとしたよ)とパパは思いました。

ある日曜日の午後、バンドは公園で演奏をしました。それまでにコンサートで演奏する機会がなかったので、パパはこの日初めて、制服を着てトランペットを吹きました。演奏が始まると道行く人々も足を止めて演奏を聞きました。困ったことに、フロッピーも公園へやってきました。演奏中に、視界の隅にフロッピーを見つけたパパは困惑しました。(一体誰がフロッピーを外に出したんだろう?)

フロッピーもパパがトランペットを吹いているのを見ると、たちまち吠え始めまし

た。バンドが演奏するとフロッピーも吠えます。(どこかへ行ってよ、フロッピー)とパパは思いましたが、バンドが演奏すればするほど、フロッピーも激しく吠えだえます。フロッピーを一瞥した指揮者は、「誰かこのばかな犬を連れてってちょうだい」といまいましそうに言いました。

フロッピーが吠えつづけるうちに、よその犬達もやってきて吠え始めました。あまりにもひどい騒音で、ついにバンドは演奏ができなくなってしまいました。「全部あの大きくてばかな、締めりのない外見の犬のせいよ」指揮者が怒って言いました。「いきなり現れて意味もなく吠え始めたのよ」そこで誰かが叫びました。「ところで、誰の犬なんだろう？自分の犬はきちんと管理するべきだよ」。

かわいそうなことに、パパはフロッピーが自分の犬だと認めるしかありませんでした。顔を赤らめながら、パパは言いました。「フロッピーっていうんです。いつもはお行儀よくしてるのに、僕がトランペットを吹くたびに吠えるんです」。指揮者は答えました。「犬達の吠え声のコーラスの中じゃ演奏は続けられないですね。もしフロッピーがあなたに対して吠えるなら、打つ手はひとつしかありません。あなたがフロッピーをお家へ連れて帰るんです」パパはベルトをリードのかわりにフロッピーにくくりつけ、フロッピーを家へつれて帰りました。「なんて悪い犬なんだ」パパは言いました。でも本当は、フロッピーはいたずらをしていただけでもないし、パパに対して吠えていたわけでもないんです。フロッピーは、ただ演奏に参加していただけだったのです。

The Band

楽団

- PG 1 Dad played his trumpet.
パパはトランペットを演奏した。
- PG 2-3 He played in the house.
Floppy barked at Dad.
彼は家の中で演奏した。
フロッピーはパパにむかって吠えた。

- PG 4-5 Dad played in the garage.
Floppy barked at Dad.
パパはガレージで演奏した。
フロッピーはパパにむかって吠えた。
- PG 6-7 Dad played in the shed.
Floppy barked at Dad.
パパは小屋の中で演奏した。
フロッピーはパパにむかって吠えた。
- PG 8-9 Dad played in a band.
パパは楽団で演奏をした。
- PG 10-11 The band played in the park.
Floppy went to the park.
楽団は公園で演奏した。
フロッピーは公園に行った。
- PG 12-13 The band played.
Floppy barked.
楽団は演奏した。
フロッピーは吠えた。
- PG 14-15 Floppy barked and barked.
The band couldn't play.
フロッピーは何度も吠えた。
楽団は演奏できなかった。
- PG 16 'What a bad dog!' said Dad.
「何て悪い犬！」と、パパは言った。